

『決脈精要』の考察

木場由衣登

日本鍼灸研究会

宋代は、医書の編纂刊行が盛んであったが、脈診についても豊富な理論的展開が成された。『脈粹』、『通真子補注王叔和脈訣』、崔嘉彦『脈訣』、『脈訣玄理秘要』、『察病指南』等、この時代には現在の脈診学の土台となるべき医書が多く誕生している。黎民寿（黎居士）の『決脈精要』もまたその一つであり、後世に影響を与えた一つである。

『決脈精要』の刊本は既に失われているが、写本のみが今に伝わる。これは帰化人の王月軒による写本（宮内庁書陵部蔵）を由来とし、幾つかの伝本（国立公文書館内閣文庫所蔵本と台湾国立故宮博物院所蔵本）もこの写本を由来とする。現存する黎民寿の著書には『決脈精要』以外に『簡易方論』11巻、『広成先生玉函経』（1～3巻）がある。現存する『決脈精要』は巻首に「新刊黎居士簡易方論卷十二」と題されており、十二巻本の『簡易方論』の巻末にあったものであると推測される。ただ、十二巻本『簡易方論』は存在せず、現存する『簡易方論』は十一巻本のみである。『決脈精要』の成立年を『簡易方論』の陳謙亭序に拠れば景定元（1260）年とされる。

『決脈精要』という書名の由来であるが、本書は歌訣を主体としているため、「決」は本来「訣」の誤記であり、「決脈」とは「脈訣」のことであったのではないか。これは仮説でしかないが、歌訣を用いた脈診書は多く、他にも『王叔和脈訣』、崔嘉彦『脈訣』などがこれに当たる。

『決脈精要』は①七表脈名、②八裏脈名、③九道脈名、④十怪脈名、⑤五行乖偉脈歌の5篇から成り、全て7字を1句とした歌賦で構成される。①～④は七表・八裏・九道の24脈と死脈についての歌賦であり、本書で最も軸となる内容である。これらの歌賦は、「脈如浮溢見皮膚、重按還虧举有余、浮本属陽惟在表、随分三部定風虚」（浮脈歌）のように七言・四句の28字によって構成される。歌賦だけでなく、黎民寿による詳細な注も加えられており、『内経』、『千金方』、『活人書』（「無求子云」）等からの引用を多く含む。

『決脈精要』（前記①～④）の七表八裏九道と死脈は、脈状の記載数をそれぞれ七・八・九・十に合わせている。また、『決脈精要』における脈状の記載順序を他の医書（宋代）と比較してみると次のようなことが分かった。

〔七表脈〕『決脈精要』、蕭世基『脈粹』（1066）、劉元賓『通真子補注王叔和脈訣』（1090）、『察病指南』（1241）の七表脈は「浮・朮・滑・実・弦・緊・洪」であり、順序を同じくする。

〔八裏脈〕『脈粹』のみ「遅・緩・微・濇・濡・弱・沈・伏」であり、それ以降（『決脈精要』と前述の書を含む）は全て「微・沈・緩・濇・遅・伏・濡・弱」であった。

〔九道脈〕『通真子補注王叔和脈訣』と『決脈精要』は同じく、「長・短・虚・促・結・促・代・牢・動・細」である。『察病指南』は「長・促・短・虚・結・牢・動・細・代」であり、末尾に「数・大」を加える。『脈粹』は「長・短・屋漏・蝦游・彈石・雀啄・魚翔・解索・釜沸・虚・牢・促・結・代・革・細・動」となっており、初期は九道脈と死脈が混交していたのが分かる。

〔死脈〕『察病指南』は「彈石・解索・雀啄・屋漏・蝦游・魚翔・釜沸」の「七死脈」であるが、『決脈精要』は「釜沸・魚翔・彈石・解索・屋漏・蝦游・雀啄・偃刀・転豆・麻促」の「十怪脈」と称される。

この十怪脈は元・危亦林『世医得效方』（1343）にも受け継がれる。（『脈粹』記載の死脈は九道脈を参照。）

現在の中国では失伝した『決脈精要』であるが、李時珍『瀕湖脈学』（1564）には「黎氏」、「黎居士」と本書からの引用が少しばかり見られる。（「促」の条文「如蹶之趣徐疾不常」は『決脈精要』促脈歌注からの引用である等。）多紀元簡『脈学輯要』（1795）に於いても死脈の注解に本書が用いられており、現代の脈状診を考証するためにも本書は必要な一書である。